

カント批判哲学に於ける構想力概念の成立（上）

松本長彦

〔目次〕

- 一 序——「主観的演繹」と「構想力」の問題——
- 二 ヴォルフとバウムガルテンに於ける「構想力」の概念
 - 1 ヴォルフに於ける「構想力」概念について
 - 2 バウムガルテンに於ける「構想力」概念について
- 三 独断的哲学から批判哲学への移行
——「形而上学講義」の「経験的心理学」の成立時期について——
<以下（下）>
- 四 「形而上学講義」における「形成力」の概念
 - 1 感性的能力としての「形成力」
 - 2 時間の三様態と「形成力」の三つの能力
 - 3 「形成力」のもう一つの区分
 - 4 悟性と感性との中間的能力としての「形成力」
- 五 結語——「形成力」から批判哲学に於ける「構想力」概念へ——

一 序——「主観的演繹」と「構想力」の問題——

九〇

カントが批判哲学を確立し、主著『純粹理性批判』⁽¹⁾を出版したのは、一七八一年である。一七七〇年に所謂教授就任論文「感性界及び叡智界の形式と原理について」を発表し、四六歳でやっと母校ケーニヒスベルク大学の論理学及び形而上学の正教授の職に就いた後、彼はほぼ一〇年間、本格的な著作を発表しなかった。所謂「沈黙の一〇年」である。カントのそれまでの精力的で才氣溢れる著述活動に比して、あまりに対照的であつたため、多くの知人、友人は訝しく思い、心配もしたようである。しかし、よく知られているように、その一〇年間は無為に過ごされたものではなかつた。彼は、「教授就任論文」でつかみかけていた、独自のまったく新しい哲学体系を基礎づける作業に没頭し、悪戦苦闘していたのである。

その「沈黙の一〇年」の成果が『純粹理性批判』であることは言うまでもない。そして、カントが最も苦勞した部分が、「純粹悟性概念の超越論的演繹」(die transzendente Deduktion der reinen Verstandesbegriffe)と名づけられた箇所であることも、研究者にとっては周知の事実である。しかも、彼はさらに六年後の一七八七年に出版した『純粹理性批判』第二版に於いて、この「超越論的演繹」を全面的に書き直している。

それほどまでにカントが苦勞した「超越論的演繹」の第一版と第二版とを読み比べたときに、容易に気付くことがある。それは、彼が第一版の「序文」(Vorrede)で「主観的演繹」(die subjektive Deduktion) (A XVII.)と名づけた一連の論述、即ち「純粹悟性それ自身を、その可能性と悟性自身が基づいている認識諸力に従つて考察する、即ち悟性を主観的關係に於いて考察する」(A XVII.)ための論述が、第一版と第二版との間では相当に異なるということである。第一版では、「予備的考察」(Vorläufige Erinnerung) (A 98.)という表題から開始され、「一、直観に於ける把

提の綜合について」(A 98-100)、「二、構想に於ける再生の綜合について」(A 100-102)、「三、概念に於ける再認の綜合について」(A 103-110)、「四、ア・プリアリな認識としてのカテゴリーの可能性の予備的解明」(A 110-114) という四つの節は、その論述のすべてが主観的演繹ではないにせよ、その内容のかんりの部分が、構想力の「三重の綜合」(eine dreifache Synthesis)を手引きとして「感能」(Sinn)、「構想力」(Einbildungskraft)及び「統覚」(Apperzeption) という三つの「主観的源泉」(die subjektiven Quellen) (A 97, auch vgl. A 95.) 或うは「認識諸力」(Erkenntniskräfte) と、それらの「主観的關係」(subjektive Beziehung) の考察に費やされ、「如何にして思惟する能力自身が可能であるのか？」(A XVII.) という問いの解明に向けられている。これに對して、第二版ではこの部分がかなり省略され、カント自身が「客観的演繹」(objektive Deduktion) (A XVII.) と呼ぶ、「悟性のア・プリアリな純粹諸概念の客観的妥当性を証明し、理解させる」(A XVI.) 論述が、その大部分を占めている。

第一版に於いてあれほど詳細に考察された「悟性がそれに基づいている認識諸力」の「主観的關係」⁽³⁾が、第二版では極めて簡単に取り扱われていることの理由は、何であろうか。それは、「純粹理性批判」の「主要な問い」(Hauptfrage)が、「悟性と理性は、あらゆる経験から自由に、何をどの程度まで認識することができるのか？」(A XVII.)と問う問である以上、それを基礎づけるのは「客観的演繹」であり、「主観的演繹」は客観的演繹の論証のために必要と考えられる範囲で考察されているにすぎない、と考えれば、十分理解できることである。しかしそれは、カントにとつて「主観的演繹」が無くて済むようなどうでもよい考察であつたことを意味する訳ではないし、ましてや容易な考察であつたことを意味する訳でもない。むしろ、カントが「沈黙の一〇年」の中で最も苦勞した部分が、この主観的演繹であつたと考えるべきであろう。悪戦苦闘して考え抜いた成果であるからこそ、第一版ではあれほど詳細に叙述したと推測できるのである。しかし、一旦筋道を立てて叙述し、主観的關係を明らかにしてしまえば、その内容自体

は「純粹理性批判」の主要目的に照らしてさほど強調すべきことではないために、第二版では大胆に省略され、その成果だけがごく簡単に使用されている、と考えることができるのである。

既に指摘したが、第一版に於ける「主観的演繹」の内実は、構想力の「三重の綜合」(eine dreifache Synthesis)を軸に、「認識諸力」の「主観的關係」を解明するものである。従って、その考察の中心に位置するのが、「構想力」(Einbildungskraft)である。筆者は、「純粹理性批判」に於ける構想力の働き(綜合の働き)については、かなり前に詳細に考察した⁽⁵⁾。本稿に於いては、このような批判哲学に於ける「構想力」の概念がどのように成立したのかを、ヴォルフ・バウムガルテンの著作に於ける「構想力」概念と、カントの『形而上学講義』に於ける「形成力」概念とを比較考察することを通して、明らかにしたい。

二 ヴォルフとバウムガルテンに於ける「構想力」の概念

まず最初に我々は、カントに於ける「構想力」(Einbildungskraft)という能力の来歴を考察してみよう。言うまでもなく、カントはこの概念を「無から創造」したわけではない。むしろ我々は、三木清の言うように、「カントはこの概念をバウムガルテンの形而上学から取ってきた。」⁽⁶⁾と考えてよいであろう。というのも、カントはケーニヒスベルク大学に於ける形而上学講義の教科書としてA・G・バウムガルテン (Alexander Gottlieb Baumgarten, 1714-62) の『形而上学』(Metaphysica) を使用しており、しかも後に示すように、同書に於けるバウムガルテンの構想力の概念は、相当程度にカントに影響を及ぼしていると考えられるからである。しかしさらに、ヘルマン・メルヒェンが指摘しているように⁽⁷⁾、Einbildungs-Kraft (imaginatio) という語は、既にヴォルフ (Christian Wolff, 1679-1754) の著作

に見出される。周知の如く、バウムガルテンはヴォルフ学徒であるから、彼の「構想力」概念がヴォルフのそれを継承したものであろうことは十分考えられる。もつとも、このようにして「構想力」あるいは「想像力」という概念の来歴を辿ってゆけば、我々はアリストテレスの『靈魂論』(De Anima)に於ける *phantasia* の概念にまで遡ることになるかもしれない。しかしまず我々は、カントがそこから出発し、それを克服していったと考えられる、バウムガルテン及びヴォルフの構想力概念を考察することによって、彼らの構想力概念とカントのそれとの相違を明らかにし、カントの構想力概念の独自性を浮き彫りにすることができると思われる。それ故、我々はまずヴォルフに於ける構想力概念を考察することから始めなければならない。

1 ヴォルフに於ける「構想力」概念について

ヴォルフは構想力を次のように定義している。

「現に存在していない物の表象は、構想 (Eimbindung) と呼ぶのが一般的である。そして、このような表象を産出する魂の能力は、構想・力 (Eimbindungs-Kraft) と呼ばれる。」

ヴォルフは、認識能力をまず「悟性」(Verstand : intellectus)と「感能」(Sinnen)及び「構想・力」(Eimbindungs-Kraft)との二種類に大別する。⁽⁹⁾この区分は、当該認識能力のもつ表象の「明晰 (klar)・判明 (deutlich)」の度合いに基づいている (Vgl. V. G. : §. 277, S. 153)。即ち、感能及び構想力の表象 (感覺 Empfindung 及び構想 Eimbindung) は、明晰ではあっても判明ではない。悟性が付け加わることによって、初めてこれらの表象は判明となる。

さらに、感能と構想力はその明晰性の度合いに於いて区別される。

「構想は、感覚の内に含まれていたものをすべて明晰に表象するわけではない。それ故に、構想には大きな曖昧さが存する。この点で、構想は感覚と区別される。」(V. G., §. 236, S. 130f.)

この理由として、ヴォルフは「構想は感覚にその起源をもつ」(V. G., §. 238, S. 132.) ことを挙げている。つまり、構想は感覚の再現(再生)(Reproduktion)であり、それが元の感覚ほど明晰ではないのは当然のことと考えているのである。またこの意味で、「感能は一般に構想・力に優越する」とも述べている。即ち、ヴォルフの考えている「構想」とは、もっぱら再生的(reproduktiv)なものであり、「記憶」(Gedächtniß)と密接に関わっている。これを端的に表しているのが、

「構想・力は、我々が以前に感覚し思惟したものの以外には何も産み出すことはない。それ故、構想とは、世界の過去の状態の表象に他ならない。」(V. G., §. 807, S. 500.)

という叙述である。ここから明らかなように、ヴォルフに於いては、構想力は、感覚または感覚に基づいた思惟を前提し、もっぱらそれらを再生する能力と考えられているのである。またヴォルフは、この構想力が行う再生の規則として、以前の感覚や構想と現在のそれとが同じ部分をもつとき、以前のものが再び現れてくるということ指摘する(Vgl. V. G., §. 238, S. 132.)。これは、デイヴィッド・ヒュームが「想像力」(Imagination)を支配する原理として強調

した「連想〔観念連合〕」(association of ideas)の原理に他ならない。⁽¹¹⁾

それ故、ヴォルフに於ける「構想力」とは、もっぱら連想の法則に従う経験的再生の能力と規定することができるのである。

2 バウムガルテンに於ける「構想力」概念について

では次に、バウムガルテンに於ける「構想力」の規定を考察してみよう。

バウムガルテンは、ヴォルフの構想力の概念を受け継ぎ、これをさらに発展させ、より詳細な規定を行っている。彼の構想力についての記述は、「形而上学」の中の「経験的心理学」(Psychologia empirica)の章に見出される。この章に於いてバウムガルテンは、「魂の諸能力」(animae facultates)を「認識能力」(facultas cognoscitiva)と「欲求能力」(facultas appetitiva)に分類し、*zur*に前者を「上級」(superior)と「下級」(inferior)の認識能力に分類する。認識能力のこのような分類の基準は、ヴォルフと同様に認識の判明性の度合いである。「何かを判明に認識する能力が、上級認識能力 (facultas cognoscitiva superior) (精神) (mens) 知性 (intellectus) である。⁽¹²⁾」これに対して、「或るものを曖昧に混乱して、または判明でなく認識する能力が、下級認識能力 (facultas cognoscitiva inferior) である。」(B. M., §. 520, in: AA., Bd. XV, S. 9.)そしてバウムガルテンは、「下級認識能力を^{zur}に「感能||感覚能力」(sensus: facultas sentiendi) (B. M., §§. 534-556)」「構想力」(phantasia: facultas imaginandi) (B. M., §§. 557-571)」「識別力」(perspicacia) (B. M., §§. 572-578)」「記憶」(memoria) (B. M., §§. 579-588)」「創作能力」(poetica: facultas fingendi) (B. M., §§. 589-594)」「予見」(praevision) (B. M., §§. 595-605)」「判断力」(judicium) (B. M., §§. 606-609)」「予感[予想]」(praesagium) (B. M., §§. 610-618)」「表示能力」(facultas characteristic) (B. M., §§. 619-623.)

に分類して詳細に考察している。

このように、構想力〔想像力⁽¹³⁾〕(バウムガルテンの用語では *phantasia* 或いは *facultas imaginandi*) は「下級認識能力」の一つとして考察されている。バウムガルテンは、構想力を次のように規定する。

「私は、私の過去の状態を、従つてまた世界の過去の状態を、意識している。世界の過去の状態の、また私の過去の状態の表象 (*representatio*) が構想 (*phantasma*) (想像 *imaginatio*、内観 *visum*、幻想 *visio*) である。」(B. M., §. 557: AA., Bd. XV, S. 19.)

「私は構想する能力 (*facultas imaginandi*) つまり構想力 (*phantasia*) をもっている。そして私の構想 (*imaginatio*) は、かつて現前していたものの知覚であるから、私がそれらを構想する場合には、存在していない感覚の知覚である。」(B. M., §. 558: AA., Bd. XV, S. 19.)

「構想力によって諸知覚は再現〔再生〕される (*phantasia perceptiones reproducentur.*)。そして、予め感能 (*sensus*) の内に存在していなかったものは、構想力の内には存在しない。」(B. M., §. 559: AA., Bd. XV, S. 20.)

このようにバウムガルテンは、構想力を、予め感能に於いて知覚された過去の状態の表象を再生する能力と規定している。

しかし、構想力の表象である構想 (*imaginatio*) も、感能の表象である感覚 (*sensatio*) も、個別的なものであるから、それらは普遍的な連関に於いて組み合わされ組織されなければならぬ (Vgl. B. M., §. 561: AA., Bd. XV, S. 20.)。これら表象を組み合わせる規則、即ち「観念を部分的に知覚すると、その全体の観念へと立ち帰る」という規

則を、バウムガルテンは「構想の規則」(lex imaginatonis) と呼び、「観念連合」(associatio idearum) とも呼んでいる (B. M., §. 561 : AA., Bd. XV, S. 20)。これは所謂「連想律」に他ならない。つまり、既に考察したヴォルフの規定とまったく同じものである。

それ故、バウムガルテンに於いても、構想力は連想の法則に従う単なる経験的再生の能力と考えられているのである。またそれ故に、構想力は、ヴォルフの場合と同様に、「記憶」(memoria) と密接な関係を有することになる。バウムガルテンは、記憶を「再生された知覚を再生する能力」(facultas reproductus perceptiones recognoscendi) (B. M., §. 579 : AA., Bd. XV, S. 24。) 即ち、構想力によって再生された表象を、以前有していた表象と同じものであると再認識する能力と規定しているが、これもまた「記憶とは、我々が以前にもっていた思考を、それが再び現れるときに、我々はそれを既にもっていたと再認識する能力に他ならない。」(V. G., §. 249, S. 139。) というヴォルフの規定とまったく同様である。

以上の考察によって、バウムガルテンの「構想力」(phantasia) の概念は、ヴォルフの「構想・力」(Erbildungs-Kraft) の概念を忠実に受け継いだもの、とすることができるのである。

しかし、バウムガルテンは、ヴォルフとは異なって、さらに「創作能力」(facultas fingendi : poetica) という能力を提示している。

「私は、構想を結合することによって、また分離することによって、即ち或る知覚の一部分だけに注意を向けることによって、創作する (fingo)。それ故、私は創作する能力 (facultas fingendi) 即ち創作力 (poetica) をもつてゐる。」(B. M., §. 589 : AA., Bd. XV, S. 26.)

バウムガルテンは、むしろ「美学」(Aesthetica: Ästhetik)の創始者らしく、感性的創作能力への目配りを怠らなかつた。もし我々の構想(心象)が、単に過去の知覚の再生にすぎないとすれば、そこに芸術的創作の入り込む余地はないであろう。しかし我々は創作の場に於いて、過去の知覚を離れて新たなイメージ(即ち構想 *Einhildung*)を抱く。その場合我々は、過去の知覚(または感覚)及びその再現像(構想)を自由に組み替えて、新たなイメージを作り出す能力を必要とする。バウムガルテンは、この能力を「創作力」と名づけたのである。⁽¹⁵⁾しかしこの創作力も、その「創作」(Creio)のためには、素材として構想力の「構想」を前提しているのであるから、基本的には、構想力・記憶と同様に、経験的能力、即ち経験に基づいてのみ働くことができる能力と考えなければならない。

それ故、バウムガルテンに於いても、ヴォルフと同様に、構想力(記憶・創作力も含めて)は、経験的再生の能力と規定することができるのである。

三 独断的哲学から批判哲学への移行

——『形而上学講義』の「経験的心理学」の成立時期について——

前章で考察したようなヴォルフ・バウムガルテンの「構想力」概念を(より広く考えれば彼らの「経験的心理学」を)把握した上で、カントは独自の構想力概念を展開してゆく。その際カントは、高坂正顕が指摘するように、「経験心理学的分析を手懸かりとしつつ、超越心理学 *transzendental Psychologie* 的分析に進み入って」⁽¹⁶⁾ゆくという手法をとっている。ここに言われる「超越(論的)心理学的分析」とは、取りも直さず、超越論的哲学の核心をなすかの「純粹悟性概念の超越論的演繹」の、カントが悪戦苦闘した問題の解決に重要な役割を果たす「主観的演繹」(die

subjektive Deduktion) に他ならない。そして、この「経験的心理学」から「主観的演繹」への移行の過渡的形態を示すと考えられるのが、カントの「形而上学講義」、特にペーリッツ (K. H. L. Pollitz) によって編集・出版された「イマヌエル・カントの形而上学講義」に収録されている「経験的心理学」(empirische Psychologie) の部分である。

まず我々は、これから考察するカントの「形而上学講義」に於ける「経験的心理学」の章が、ヴォルフ・パウムガルトンの「経験的心理学」からカントの「主観的演繹」への移行の過渡的形態を示すと考えられる根拠を示すために、「形而上学講義」に於ける「経験的心理学」の章の成立時期について、文献学的な考察を行っておこう。

ペーリッツ編集の「形而上学講義」は、カントの講義の聴講者が残した講義ノートを基に作られている。ペーリッツの「序文」によれば、その底本となった講義ノートは、「二種類あつた。特に「経験的心理学」の部分を含む講義ノートは、後にハインツェ (Heinze) によって「L₁」(恐らく die erste Leipziger Handschrift の略号) と名づけられたが、この講義ノートについてペーリッツ自身は、「書き方から見てより古い方のものには、それが何年にカントの講義を筆記したものであるかという記載がなかつた。」(AA. Bd. XXVIII, 2, 2, S. 1511.) と述べ、もう一方の講義ノート(同じくハインツェによって「L₂」と名づけられた)については、「一七八八年に筆記され、他の人によって一七八九年または一七九〇年にその欄外に部分的に訂正され、さらにまた加筆、補充されている。」(AA. Bd. XXVIII, 2, 2, S. 1512.) と述べている。従つて、ここで問題となる「経験的心理学」を含む「L₁」ノートが、何年頃のカントの講義を筆記したものであるかは、不明である。

そのため、G・レーマン (Gerhard Lehmann) が『アカデミー版カント全集』第二八巻の「付録」に於いて紹介しているように、この「L₁」ノートの成立年代を巡つて、研究者の間でも様々な説が提出されている。例えば、B・エルトマン (Benno Erdmann) は、「一七七三／七四年の冬学期以降で、あまり下らない時期」(AA. Bd. XXVIII, 2, 2,

S. 1341.) の講義の筆記であろうと推定し、P・メンツァー (Paul Menzer) は、「一七七八／七九年または一七七九／八〇年」(AA. Bd. XXVIII, 2, 2, S. 1345.) の講義の筆記であろうと推定している。さらにE・アーノルト (Emil Arnold) は、「一七八一年以降のものではないかと考え、一七七八／七九年から八四／八五年の間と考える余地を残しながらも、恐らくは一七八三／八四年に落ち着くのではないかとしている」(AA. Bd. XXVIII, 2, 2, S. 1343.)。

このように、研究者によって多少の年代の相違はあるが、この「L」ノートが「純粹理性批判」成立の直前(もしくは直後)のカントの思想を伝えるものであるという点に関しては、意見は一致している。また、この講義ノートによって伝えられたカントの「形而上学講義」が、バウムガルテンの「形而上学」をテキストとし、全体の構成はこれに則りながら、具体的な個々の論述に於いては随所にカント独自の概念規定が見受けられることを考え合わせれば、この「L」ノートの「経験的心理学」に於いて、カントが従来の経験的心理学を克服して、かの「主観的演繹」への道を切り開いてゆこうとする姿が現れていると考えることができるのである。⁽¹⁹⁾

(未完)

注

(一) Immanuel Kant, *Kritik der reinen Vernunft*. Riga 1781, 1787. 以下、本書からの引用は「Philosophische Bibliothek Bd. 37a」, hrsg. von Raimund Schmidt, Hamburg 1956. により、慣例にならって第一版の頁数をA...、第二版の頁数をB...と二重形式で、本文中に指示する。他のカントの著作よりの引用は、所謂「アカデミー版カント全集」(Kant's Gesammelte Schriften, hrsg. von der Königlich Preussischen Akademie der Wissenschaften.) により、同全集の巻数と頁数を「AA. Bd...., S....」と二重形式で指示する。

(二) 第一版の「主観的演繹」は、所謂「構想力の三重の綜合」(eine dreifache Synthesis der Einbildungskraft) の考察を軸に叙述されて

いる。これは第二版では、第二四節に於いて「構想力の超越論的綜合」である「形象的綜合」(die figurliche Synthesis) という概念に集約されている (vgl. B. 150-153)。これについては、拙稿「カントにおける綜合と統一超越論的綜合の構造について」(『哲學』第三五集、広島哲学会、一九八六年、二二一―二二五頁) 参照。

(3) 改めて指摘するまでもないことではあるが、ここでいう「主観的」(subjektiv) とは、文字通り「主観の」「主観の側にある」「主観に関わる」という意味である。従って、ここでいう「主観的關係」とは、(主観に備わっている認識諸力の主観内部での關係(つながり)) という意味である。「主観的演繹」における「主観的」も同様の意味で理解しなければならない。決して、日常語としてよく使用される、(客観的 ≡ 普遍妥当的・确实) に対立する (主観的 ≡ 個人的・不确实) という意味ではない。

(4) このように見れば、主観的演繹を必要最小限に抑え、客観的演繹を前面に押し立てた第二版の叙述の方が、本来の目的に沿った叙述と評価することもできよう。しかし、ショーペンハウアーやハイデッガーのように、第一版の叙述の方をより高く評価する哲学者も存在する。筆者は、第二版「序文」に於いてカント自身が、第二版の叙述で分かりにくいところがあれば必要に応じて第一版の叙述と比較することを勧めている (vgl. B. XLII)) とを考え合わせれば、第一版の叙述と第二版の叙述の優劣を論ずることにさほど意味があるとは考えていない。

(5) 拙稿「カントに於ける「構想力」について」(『シンポジオン』第三〇号第二分冊、広島大学文学部哲学研究室、一九八四年、五七―七〇頁)、拙稿「カントにおける綜合と統一超越論的綜合の構造について」(『哲學』第三八集、広島哲学会、一九八六年、二二一―二二五頁)、拙稿「カントに於ける内的觸発について」(『純粹理性批判』§. 24 の一考察) (『哲學』第三九集、広島哲学会、一九八七年、三〇―四四頁) 等参照。

(6) 三木清「構想力の論理 第二」、岩波書店、昭和二年、六四頁。

(7) Hermann Morchen, *Die Einbildungskraft bei Kant*, Tübingen 1970, S. 10f. und S. 14.

(8) Christian Wolff, *Vernünfftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt*, §. 235, in: *Gesammelte Werke*, 1. Apr. Deutsche Schriften, Bd. 2, hsg. von Charles A. Corr, Hildesheim 1983, S. 130. 以下同書は V. G. と略記し、該当する節と全集版の頁数を本文中に示す。

- (9) 別の箇所でヴォルフは「魂の能力」(Kraft der Seele)として「感能(Sinnen)・構想・力(Einbildungs-Kraft)・記憶(Gedächtniß)・熟考する能力(Vernügen zu überdenken)・悟性(Verstand)・感性的欲求(similiche Begierde)・意志(Wille)」を列挙し「われらに『魂の力』(die einige Kraft der Seele)が様々な現れたものと考えられるべきであると述べている(Vgl. Ch. Wolff, V. G., S. 747, S. 465)。
- (10) Christian Wolff, *Vernünfftige Gedanken von Gott, der Welt und der Seele des Menschen, auch allen Dingen überhaupt, anderer Theil, bestehend in ausführlichen Anmerkungen*, S. 72, in: *Gesammelte Werke*, 1. Apr. Deutsche Schriften, Bd. 3, hrsg. von Charles A. Corr, Hildesheim 1983, S. 142.
- (11) Cf. David Hume, *An Enquiry concerning Human Understanding*, 1748, Section 3, in: *The Clarendon Edition of the Works of David Hume, A Treatise of Human Nature, A Critical Edition*, Vol. 3, ed. by Tom L. Beauchamp, Oxford, 2000, p. 12ff.; and D. Hume, *A Treatise of Human Nature: Being An Attempt to introduce the Experimental Method of Reasoning into Moral Subjects*, 1739, 1740, Book 1, Part 1, Section 4, in: *The Clarendon Edition of the Works of David Hume, A Treatise of Human Nature, A Critical Edition*, Vol. 1, ed. by D. F. Norton & M. J. Norton, Oxford, 2007, p. 12ff.
- なお、このようにヴォルフの Einbildungs-Kraft と ヒュームの imagination との間には、かなり似たところがある。また、カントの思想により大きな影響を与えたのは、ヒュームの imagination 概念であることも確かかもしれない。これらの問題に関しては、また別の機会に考察する予定である。
- (12) Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica*, S. 520, in: AA., Bd. XV, S. 9.
- バウムガルテンの「形而上学」のテクストは「アカデミー版カント全集」の第二五巻及び第一七巻に収録されているので、同全集から引用する。(ただし、バウムガルテンの「形而上学」の引用に関しては、該当する節を示すために「B. M., S. ...」という指示をさらに付記する。)なお、「アカデミー版カント全集」第一五巻のE・アディッケス(Erich Adickes)の解説によれば、カントが使用していたバウムガルテンの「形而上学」は、一七五七年刊行の第四版である(Vgl. AA., Bd. XV, S. IX.)。筆者は「第七版(一七七九年刊行)の複製版(Alexander Gottlieb Baumgarten, *Metaphysica* (Editio VII), 2. Nachdruckauflage der Ausgabe Halle 1779, Hildesheim,

1982.) 及び同書を底本としたラテン語・ドイツ語対訳版 (Alexander Gottlieb Baumgarten, *Texte zur Grundlegung der Ästhetik*, Lateinisch-Deutsch, übersetzt und hrsg. von Hans Rudolf Schweizer, Philosophische Bibliothek Bd. 351, Hamburg, 1983.) も参照したが、テクストの異同はほとんど見られなかった。

(13) *phantasma* 及び *imaginatio* は一般的には「想像」と訳され、*phantasia* や *facultas imaginandi* は「想像力」と訳される。しかし、ラテン語 (元来はギリシア語) の *phantasma* はドイツ語で *Einbildung* と訳され、*phantasia*=*facultas imaginandi* は *Einbildungskraft* と訳されるから、カントの用語法とその訳語の習慣に従って (若干の違和感はあるかもしれないが)、本稿では *phantasma* は「構想」、*phantasia*=*facultas imaginandi* は「構想力」と訳すことにする。

(14) その際は彼は、この能力の核心が、「様々なものの表象を統一において」捉える (結合する) ところであり、従って「諸物の諸々の同一性を知覚する能力」 (*facultas identitates rerum percipiendi*) が成立する (ことを指摘している (B. M., §. 589: AA, Bd. XV, S. 26.)。この指摘は、後のカントの「統覚の総合的統一」 (die synthetische Einheit der Apperzeption) の概念に繋がるものとして、注目に値するであろう。

(15) 高坂正顯「カント」(理想社、一九七七年) 一一三頁。

(16) *Immanuel Kant's Vorlesungen über die Metaphysik*, hrsg. von K. H. L. Pöhlitz, Erfurt 1821.

(17) *Vgl. Immanuel Kant's Vorlesungen über die Metaphysik*, hrsg. von K. H. L. Pöhlitz, Erfurt 1821, nachgedruckt Darmstadt 1975, Vorrede, S. IVf.: AA, Bd. XXVIII, 2, 2, S. 151ff. ヘーリンツの「序文」も「アカデミー版カント全集」第二八巻第二分冊の二に掲載されているので、読者の利便性を考慮して、引用箇所を示すは同全集により行う。

(18) *Vgl. AA, Bd. XXVIII, 2, 2, Anhang, Einleitung von Herausgeber: Gerhard Lehmann, S. 1338ff.*

(19) 以下、本稿に於いてはこの「L」ノートを「形而上学講義」と呼ぶ。「L」ノートは「アカデミー版カント全集」第二八巻第一分冊 (AA, Bd. XXVIII, 1.) に収録されているので、同講義ノートからの引用はすべて同書より行い、*KVM* の略号を添えて、同書の頁数だけを本文中に指示する。